



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3068 号 2016.6.9 発行

発達障害の子のために「親ができること」「その子らしく生き抜く」を第一に

AERA 編集部 2016 年 6 月 6 日



金子訓隆さん、真輝くん 真輝くんはサッカーが大好き。訓隆さんは、「最近では体力もついてきて、走るペースに僕がついていけないことも」とうれしそうに話した（写真：今村拓馬）

「我が子が障害児？」「なぜうちの子だけ？」。親たちは長らく迷い、とまどう。人とのかかわりが苦手な子がストレスを減らし、その子らしく生き抜くために。あえて社会に開いて新しい関係を築き上げた親子たちがいる。

病院を受診しようにも待機者が多く

学習椅子には真新しいランドセルが掛かっていた。今春、神奈川県小学校に入学した浜田リュウくん（6）は、おやつを前に「ヤッター、どらやき！」。生え替わりで前歯が抜けた愛嬌たっぷりの笑顔をみせた。

リュウくんは 3 歳児健診で保健師から「発達障害の疑いあり」と指摘された。その後、病院で発達障害の一つ、知的に遅れない「自閉症スペクトラム」と診断された。現在は公立小学校の通常学級に在籍している。

入学当初から学校で給食当番も掃除もこなしていると聞き、母の悦子さん（36）は胸をなでおろした。登校 3 週目に、初めて一人で下校できたリュウくんは、帰宅後洗面所で手を洗う時に鼻歌を歌っていた。悦さんは感慨深げに話した。

「保育園の時は本当に通えるようになるまでに 3 カ月ぐらいかかりました。その頃から考えると信じられないぐらいです。本人は今も人が集まる場所は得意ではありません。毎

朝タイマーで計って5分でも好きなゲームをしてから登校します。『今日も一日がんばろう』と息を整える日課なのでしょう」

幼少期、子育て支援の集まりに連れていっても、他の子たちと交わらない息子の姿に、なぜうちの子だけ？ 次第に同年齢の子の集まりから足が遠のいた。当初は相談できる人もいなかった。自治体と提携している病院を受診しようにも待機者が膨れ、臨床心理士と面談するまでに半年、医師の診断を受けるまでに8カ月近くかかった。

遊び感覚のおうち療育

待機中、悦子さんはネットで情報を検索してふと、発達障害をはじめとする障害児への支援事業を行う会社が指導員を募集している広告に目が留まった。

「これしかない！ ただ待機している時間がもったいない」

悦子さんは、この会社で指導員としてのべ1200組の子と親にかかわった。経験を積む中で、障害の特性やABA(応用行動分析学)をベースにした発達障害の子への療育法を学んだ。

一方、リュウくんが4歳になる少し前のこと、悦子さんはジレンマを感じるようになった。発達障害の子どもは、成長にバラツキがある。家でも息子に療育を実践するなか、親がしゃかりきになるあまり、息子の側に「やらされている感」が漂っていたからだ。次第にリュウくんから笑顔が消えていった。

「療育の前に、『この子ありき』だという大事なことを、私は忘れかけていた」

悦子さんは心のギアを入れ替えた。何度も反復させる訓練で子を変えようとする療育は、この際思い切ってやめてみよう。代わりに、療育のエッセンスは採り入れながら、子どもの行動をよく観察し、周囲の環境を変えることに徹してみようと。そこから悦子さんは、自宅でゆるやかにできる遊び感覚の実践を次々に着想した。名付けて「おうち療育」だ。



浜田悦子さん、リュウくん リュウくんの外出が困難だった頃、医師の助言もあり家にいるのもよしとした。元気に体を動かすためにも、バランスボールは重宝した(写真:堀内慶太郎)

例えばリュウくんがじっと座るようになる環境づくりのため、リビングのテレビの前にソファではなく、大きなバランスボールを置いた。テレビ好きのリュウくんは、気づけばそこに乗るように。悦子さんは瞬間を見逃さずに「あ、カッコよく座っているね」と気づいたらすぐ褒めた。するとリュウくんは姿勢を保つことに前向きになり、おのずとおなか周りの「体幹」の筋肉が鍛えられていった。

いま学校の授業時間は、立ち歩くことなくじっと座っている。取材で訪れた時、リュウくんはまるで曲芸師のように自由にポーズを変えながら、バランスを取ることを楽しんでいった。

「おうち療育家」として独立した悦子さんは、次々に生まれ出る実践法のアイデアを、同様に困っている母親たちにおすそ分けし、それが仕事にもなった。

「リュウが家から一歩も出られなかった時期、私自身も外出がままならず、不自由と感じたことは一度や二度ではありません。でも今は、この子のおかげで思ってもみなかったライフワークが見つかったと感じています」

障害児の子育ては、母親が中心になりがちだ。一人にかかる負担も大きい。ならば母親と子どもたちのために、父親にできることは？ そんな模索を続けてきた団体がある。2012年、埼玉県でシステム会社を経営する金子訓隆(のりたか)さん(48)ら、発達障害の子がいる父親10人が立ち上げたNPO法人「おやじりんく」(さいたま市)だ。父親たちが活発に交流する機会をつくり、父親の視点を生かしながら子育てや子どもの将来の自立・就労支援を考えていく。

オヤジがブログで交流

訓隆さんには、知的な遅れを伴う「自閉症スペクトラム」と診断された長男がいる。現在小5の真輝(まさき)くん(10)だ。診断を受けたのは、2歳10カ月のとき。訓隆さんはすでにその時、心の準備ができていたという。妻からの「SOS」を拾い上げ、ネットを介

して情報を調べ上げていたからだ。

「公園で木漏れ日のキラキラを1時間ぐらい見上げている」

「ミニカーを一列に並べ続ける」

妻から聞くこんな我が子の特徴は、自閉症の子を持つ母親たちが綴るブログの内容と合致していた。訓隆さんはブログの母親たちと連絡を取り合い、入手した情報をもとに自治体の福祉課や子育て支援センター、児童精神科医がいる療育施設など、手がかりがつかめそうな場所に足を運んだ。そうした場で出会った医師が、真輝くんを1年以上経過観察し、比較的早期の診断につながった。

「早くから就学に向けて計画したり準備できたりしたのは、出会いや情報があつたおかげ」

と言う訓隆さんは、今度は自分が発信する側にまわろうと決めた。かつて大手企業でITコンサルタントを務めていた経験もあり、情報発信はお手のものだった。真輝くんが3歳の時から、子育てブログ「マサキング子育て奮闘記」を始めた。

求められるのは、オープンで信憑性のある情報だと考え、息子を実名かつ写真入りで紹介した。父親としての思いを等身大に綴ったブログは、一日4000アクセスを超えた。

「オヤジの僕がブログを書き始めたら、全国のオヤジたちからアプローチされるようになった」

ブログを通じて、訓隆さんは発達障害児の親たち千人と交流を重ねた。ビジネスパーソン、社会的ネットワークを持つ人など、人材の宝庫だった。これらオヤジたちのパワーを結集して、発達障害児の支援や雇用創出に生かせたら。そんな思いが「おやじりんく」につながった。

子どもたちは地域の中で生きていってほしい。そんな願いから、この団体で児童デイサービスも開設した。それまでの仕事を退職してデイサービスの施設長を引き受けたメンバーもいる。

「発達障害児に日々向き合う母親たちを休ませるために、父親が仕事を休んで子育てをバトンタッチするのもいい。障害を理解し、広くリサーチして社会的課題を洗い出すことも重要。地域に出かけていって周囲の理解を求めるという役割もある。考えてみれば、父親だからこそできることは、いくらでもあると気がつきました」(訓隆さん)

発達障害のある子を育てる親たちにとって最大のテーマは、将来の自立だ。



千葉県の子山裕子さん(43)が目下取り組むのは、中学2年生の和くんの「自立大作戦」だ。

子山裕子さん、和くん 最近はお友だちから和くんにお電話がかかってきて、こそこそお話をしていることも。「学校の友だちができたことが何よりうれしい」と裕子さん(写真:堀内慶太郎)

和くんは軽度の知的障害があるが暗記力があり、「指導の工夫をして障害を目立たなくしました」(裕子さん)。計算がずば抜けて速く、そろばんは習い始めてすぐ有段者になった。百人一首も幼少時に覚え、競技かるた大会を総なめにする。

けれども障害のため、人とのかかわりが苦手で、興味の範囲が狭く、不器用。感覚の過敏さもある。そんな側面をカバーするため、小学生までは裕子さんが何事にも先回りしてきた。

幼少期は、シャツの襟首のボタンを嫌がって着ない和くんが幼稚園に通えるようにと、入園前に制服を入手。緩めて下の方につけたボタンで留める練習をし、それを毎日1ミリずつ上にあげていき、3カ月かけて着られるようにした。

和くんは集団行動や状況の変化に対応するのが苦手。運動会、クリスマス会、遠足とい

った行事ごとは、全て家で予行演習して臨ませた。運動会で踊るダンスは、音楽テープをダビングして、家でも練習した。

失敗は「あえてさせる」

小学校に入り、給食当番も清掃活動も参加しなかった和くん。裕子さんは「いじめにつながるのでは……」とヒヤヒヤした。かっぱう着を買い、家で汗物だけはよそえるよう特訓をした。

中 1 の時、裕子さんは発達障害に詳しい大学教授に相談に行った。国語の文章読解でまず和くんの勉強法を聞くつもりだったが、教授にこう問われた。

「お母さんは何を望んでいるんですか？ 和くんを親の思い通りにしようと思いませんか？ 僕は和くんの将来を思えば、まず『自分が』やりたいことを見つけてほしい。『自分で』洗濯やごはんの用意、掃除ができるようになってほしいと思う」

裕子さんはこの時はたと気づいた。いまこの子に必要なのは点数じゃなく自立だ、と。

「自立大作戦」には夫の功士さん（48）も全面協力している。週末はシェフとして家族のごはんづくりをする功士さんは、和くんに献立を決めるところから任せている。自分が食べたいものの材料をリストアップさせ、それらを買えるだけのお金を渡す。親はスーパーにはついていけない。ジャガイモ 1 個を買うのに、使い切れないほどの大袋入りを買ってくることもあるが、失敗は「あえてさせる」。

取材で和くんの買い物に同行した。袋に入りきらないネギを手にした和くんは、購入する際、店員に交渉して半分に切ってもらっていた。その様子を伝えると、「へー、和がそんなことも。やらせてみるものですね」と裕子さんは目を細めた。

発達障害の子と社会との段差を埋めるべく、親は幼少時から試行錯誤する。だがもっと難しいのは、親がその「ガード」を外すことなのかもしれない。

※この記事はAERA5月23日号から5回にわたり連載している集中連載「発達障害と生きる」の第4回です（ライター・古川雅子）

障害者の雇用拡大へ 吹田市の広報紙配布を委託

大阪日日新聞 2016年6月8日



大阪府吹田市は今年4月から、毎月発行する市の広報紙の配布業務を一部地域で市内の障害者団体に委託している。障害者の雇用拡大と社会参加促進が目的。団体側は「これをきっかけに、地域との交流や障害者に対する理解が深まれば」と期待を寄せている。

同市では「吹田市障がい者就労施設等からの物品等優先調達推進方針」を2014年1月に策定。市報配布業務は、この取り組みの一環として行う。広報紙をポストに投函する作業所の利用者（手前）と職員

今回、市内31の障害者事業所が加盟するNPO法人すいたの輪が受託。加盟事業所で分担し、

五月が丘東、出口町、川園町の3地域4079世帯を担当する。契約単価は1部につき8円40銭（税抜き）で、年間の委託業務費として約46万円を見込んでいる。

「利用者たちはやりがいを感じ、配布に取り組んでいます」と、出口町を担当するさつき福祉会障害者作業所（同市出口町）の長谷川貞子施設長。配布は作業所の職員とともに行う。

広報紙を受け取った住民からは「ごくろうさま」と声を掛けられ、利用者も生き生きとした表情で取り組んでいるという。

広報紙は約17万部発行。多くは、市の委託を受けた一般事業者が各世帯や公共施設に配布している。

市の担当者は「取り組みは障害者の方々の雇用拡大につながるものと考えています。今後、事業所と協議しながら配布地域を増やすことを検討していきたい」としている。

避難所で字幕ニュース 県と障害者放送機構が協定

岐阜新聞 2016年06月08日

災害時の連携協定を結んだ認定NPO法人CS障害者放送統一機構の高田英一理事長と古田肇知事（左）＝7日午後、県庁



岐阜県と認定NPO法人CS障害者放送統一機構（大阪市）は7日、災害時における障害者支援に向けた包括的連携協定を締結した。大規模災害が発生した際、テレビの緊急災害ニュースを字幕や手話付きで見ることができる機器などを県内の福祉避難所に優先的に設置してもらう。全国初の取り組みという。

同機構は、聴覚障害者向けに手話や字幕による情報を独自のCS通信で発信。テレビに機器を備え付けると、特定の緊急災害ニュースが字幕や手話付きで見ることができる。また、視覚障害者向けに地デジテレビの音声が開けるラジオも設置される。

東日本大震災以降、災害時における障害者らへの情報伝達支援に対する要望が県に寄せられていた。災害時、県からの要請を受けた同機構は、障害者らを受け入れる福祉避難所479カ所などに情報受信機器を設置する。

協定締結式が県庁であり、古田肇知事と高田英一理事長が協定書に調印。古田知事は「災害時に刻一刻と変化する情報を的確に伝えるのは重要なこと。避難所の生活向上とともに、安全の確保に期待したい」、高田理事長は「南海トラフ巨大地震の発生が指摘される中、岐阜県と協定を結んだことは意義がある」と述べた。

社会参加に向け元気にステージ 福祉14施設の利用者

佐賀新聞 2016年06月08日

伊万里市の福祉施設利用者による合同発表会「ほほえみ広げてふれあいステージ」が4日、伊万里市民センターで開かれた。



障害者の就労支援施設や特別養護老人ホーム、グループホームなど14施設の利用者が歌や踊りを発表。元気いっぱいの演技に会場は温かい拍手に包まれた。センター内の文化ギャラリーでは15施設の利用者が手掛けた書道や陶芸、貼り絵、手芸などの作品展示も開かれた。展示は8日まで行われる。

ふれあいステージは高齢者や障害者が自分の特技を発表することで自信を持ち、社会参加への足掛かりとなることを目標に毎年開いている。16回目の今年は「心の輪」をテーマに開催した。

障害者就労の取り組み公開 倉吉養護で企業セミナー

日本海新聞 2016年6月8日

障害のある生徒の就労への取り組みなどを公開する「鳥取県中部地区就労促進セミナー～ワーキングフェスタ in くらよし～」(倉吉養護学校主催)が7日、倉吉市の同校で開かれた。授業公開や意見発表、喫茶コーナーを通じて障害者の就労について理解を深めた。

障害者の雇用について意見を述べあう事業主ら＝7日、倉吉養護学校



セミナーは障害者への理解、啓発を促進するのが狙い。県中部地区の約50社の企業が参加した。

体育館では、同校と産業人材育成センター倉吉校、琴の浦高等特別支援学校の生徒が学校紹介を行い、代表生徒が「自分自身と向き合い、働く力を身に付ける」など職場体験を通して得た力や得意なことをアピールした。

フォーラムでは「合理的配慮の提供について」をテーマに、障害者を採用している企業やこれ

から取り組む企業3社が現状や雇用への方策などについて語り合った。ドアーズの柴田智宏社長は「企業はこんなことができないかと声を掛け、生徒も何ができるか声を出す。企業も生徒も先生もみんなが情報を共有することが大事」と説いた。(石原美樹)

放送文化基金賞にNHKスペシャルなど16番組 NHKニュース 2016年6月8日

優れた番組や放送技術の向上に貢献した人などに贈られる、ことしの放送文化基金賞に、5年前に起きた原発事故の実態を描いたNHKスペシャルなど16の番組が選ばれました。

放送文化基金賞は優れた番組や放送技術の向上などに功績があった個人やグループを表彰するもので、ことしは16の番組と13の個人やグループが選ばれました。

このうちテレビドキュメンタリー部門では、最優秀賞に、高齢者が集う食堂を舞台に幸せな老後とは何かを描いた、青森放送の「しあわせ食堂 笑顔と孤独と優しさ」とが選ばれました。

優秀賞には、世界最悪レベルとなった5年前の東京電力福島第一原発の事故で現場で何が起きていたかを、当事者の証言や発掘した事実などを基に再現ドラマ化した、NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」が選ばれました。

このほか、テレビドラマ番組部門ではTBSテレビの「赤めだか」が、テレビエンターテインメント番組部門では東海テレビ放送の「人生フルーツ ある建築家と雑木林のものがたり」が、ラジオ番組部門ではCBCラジオの「贅(にえ)の森」が、それぞれ最優秀賞に選ばれたほか、ラジオ番組部門の優秀賞にはNHK名古屋放送局の「FMシアター あいちゃんは幻」が選ばれました。

放送文化基金賞の贈呈式は、来月5日に行われます。

抱っこひもリュック人気 育児経験生かし簡単開発 神戸新聞 2016年6月8日

赤ちゃんの抱っこひもに取り付けるリュックサック「pomochi(ポモチ)」が人気を集めている。開発したのは神戸市垂水区の高橋梨恵さん(31)。自身の育児経験を生かしたデザインが、ブログや会員制交流サイト(SNS)を通じて注目され、2年間で700個を販売する人気に。事業を拡大し、本年度中の法人化を目指している。

ポモチは、両肩に掛ける抱っこひもに使用でき、肩ひもに引っかけるだけで取り付けられる。前かがみになっても中身が落ちないようにふたを付け、脇のファスナーを開ければ底のものが取り出せる。布地5色とポケットの柄100種類を自由に組み合わせられるようにし、価格は7500円(税別)から。

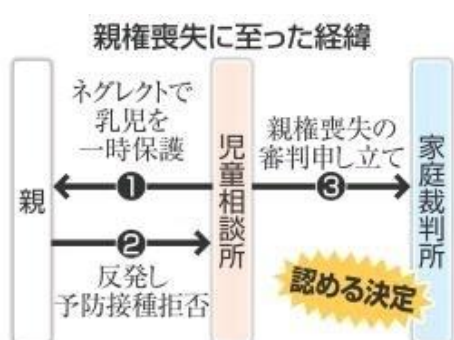
2013年に長男を出産した高橋さん。小児科に行った際、子どもを抱きながら、手持ちかばんから財布や母子手帳を何度も出し入れするのに不便を感じた。既製品はなく、自分なりに工夫を凝らして作り上げた。

当初はあくまで自分用だったが、育児ブログに掲載すると「私も欲しい」「売らないの？」など反響が大きく、同年11月からインターネットで販売を始めた。SNS上で評判が拡散したり、雑誌で紹介されたりして人気に火が付いた。

現在は内職工ら5人体制で生産しているが、1カ月100件ほどの注文をこなすので手いっぱい。そこで今年5月、神戸市中央区の実家を作業場に改装。工業用ミシンも1台導入し、新たにスタッフを採用する予定だ。

資金面では日本商工会議所や兵庫県の助成金などに申請し、事業の拡大も目指す。高橋さんは「実店舗での販売を視野に展示会への出展も考えている。ママのアイデアで育児を楽しくできれば」と話している。ポモチTEL050・7110・9294

乳児の接種拒否で親権喪失 家裁決定「子の利益侵害」 西日本新聞 2016年06月08日



親権喪失に至った経緯

九州地方の家庭裁判所が3月、乳児への予防接種を拒否した母親について児童相談所から「親権喪失」の審判申し立てを受け、「子どもの利益を侵害した」として認める決定をしていたことが7日、関係者への取材で分かった。家裁は、児相が昨年、母親の育児放棄（ネグレクト）により乳児を一時保護した経緯も重視。予防接種拒否の理由は医学・思想上の問題ではなく「児相職員への感情的反発」と認定した。

親権喪失は、虐待など子どもの利益を害する行為について2年以内に改善が見込めない場合、無期限に認められる措置で、民法で規定されている。

対人恐怖症に認知療法有効 半数で症状消える

共同通信 2016年6月7日

日常的な人付き合いに強い恐怖や不安を感じ、生活に支障が出る社交不安症（対人恐怖症）について、宮崎大や千葉大などのチームは7日、抗うつ剤による治療が効かない患者でも、面接などを通じて行動の幅を広げる「認知行動療法」を加えると半数近くの人の症状がほぼ消えたとの研究結果を発表した。

社交不安症が自然に回復しない人には抗うつ剤を投与することが多いが、7～8割の人は十分に改善せず、新たな治療が求められていた。この研究成果を受け、社交不安症に対する認知行動療法に4月から公的医療保険が適用されている。

附属池田小 児童殺害事件から15年 追悼の集い

NHKニュース 2016年6月8日

大阪・池田市の大阪教育大学附属池田小学校で8人の児童が男に殺害された事件から、8日で15年になります。学校で追悼の集いが開かれ、遺族らが黙とうをささげました。

大阪教育大学附属池田小学校では、平成13年6月8日、刃物を持った男が校内に侵入し、8人の児童が殺害され、教師を含む15人がけがをしました。

学校では毎年、事件が起きた日に追悼の集いが開かれていて、事件から15年となった8日は、遺族をはじめ、児童や保護者、教職員などおよそ1300人が出席しました。そして、亡くなった8人の児童を悼んで8つの鐘が鳴らされるなか、全員で黙とうをささげました。

集いでは、佐々木靖校長が「本校には、あの事件の重大性を語り伝え、事件の風化を防止する責務があります。私たちができること、すべきことは、事件の教訓を胸に前を向いて、学校安全の推進に向け力を合わせることにしかありません」と述べました。

このあと、児童を代表して6年生3人が「教えられるばかりでなく、自分で考え行動することの大切さを学びました。これまでに受け継がれてきた先輩方の思いを下級生に伝え続け、安全を願う心を忘れず、これから先もずっと過ごしていきます」と誓いのことばを述べました。

大阪教育大学附属池田小学校では、事件を教訓に「安全科」という授業を設け、子どもたちの命を守るための教育を続けています。

当時1年生で、学校に設けられた献花台に花を手向けにきた21歳の女性は「15年がたっても当時のつらい記憶ははっきりと覚えていて、あの日は絶対に忘れられない日です。亡くなった友人たちのためにも懸命に生きていきたい」と話していました。

塩崎大臣会見概要 (H28. 6. 7 (火) 10:39 ~ 10:50 省内会見室)【広報室】

《閣議等について》

(大臣) おはようございます。私からは特にございません。

《質疑》

(記者) 消費税増税の先送りが与える社会保障への影響についておうかがいします。先日の総理会見で、先行して実施すると言及の無かった年金分野の対策ですが、年金の受給資格の短縮や低所得のお年寄りに対する年6万円の給付金などの施策に対して、公明党を中心に実施を求める声があります。また、民進党は、実施する項目と実施しない項目をはっきりさせないことについて無責任だという指摘をしています。これについて大臣の考えをお願いいたします。

(大臣) これは先週の総理の会見でも、給付と負担のバランスや責任ある政治ということを考えれば、10パーセントへの引上げを延期する以上は、その間に引き上げた場合と全く同じことをやるということとはできないと明確に話があったわけでありまして。また、民進党の岡田代表は、赤字国債を財源に社会保障の充実を行うというような、無責任なことをおっしゃっていますが、これは子どもの財布から了解なしに金を抜き取るような話でありますから、我々はしっかりと財源確保をしながら社会保障を充実させるという、3党合意とはまさにそのことで合意した、3党の枠組であったと思います。民進党、旧民主党の皆様はそれを忘れてしまったと見えます。子ども達に対して最も無責任なことをやろうとしていると私は思います。一方で、保育や介護について、総理から受け皿の整備や保育士、介護職員の処遇改善は予定どおりやるということを明確に示されました。アベノミクスを一段と加速することによって税収を上げることで、その果実も使って可能な限り社会保障を充実させるということも同時に明確にしたわけでありまして、優先順位を付けて社会保障の充実を可能な限りやっていくことが、責任ある政治の基本であると思っております。具体的にお尋ねのありました、低年金者への給付の問題や、25年を10年にするという問題については、今の基本的な考え方の下、今後、予算編成過程の中で決め込んでいくということだと思います。

(以下略)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行